北九州市立文学館 ニュース

文学の栞（しおり）

Kitakyushu Literature Museum News

第33号

2023年3月31日発行

「本は二度味わうんだよ。」

館長　今川　英子

四年ぶりに「林芙美子文学賞」の表彰式が芸術劇場中劇場で開催され、選考委員の井上荒野さん、角田光代さん、川上未映子さんには、「この三年に考えたこと」というテーマで記念トークをお願いしました。その内容は二百人を超える来場者自身にもそれぞれに問いかけるものでもあり、会場は熱気に溢れていました。

作家の仕事は基本的に机（パソコン）に向かって言葉を紡ぐことなので、緊急事態宣言中でもさほどの変化はないように思われますが、外出がままならない、人と会えない、外食ができないことは、じわじわとボディブローのように暮らしや作品に変化を強いているようでした。

井上さんは、この間、東京から信州の別荘に本拠地を移したこと、角田さんは、源氏物語の現代語訳に六年を費やした後遺症で、小説の書き方が分からなくなっていること、川上さんは『ヘブン』がブッカー国際賞の最終候補作となりイギリスに渡航したけれど同行者がコロナ陽性となり帰国まで奔走したことなどを披瀝されましたが、彼らが同様に感じていることは、コロナ禍は社会を変えたのではなく、さまざまな問題を顕在化させ、「弱い人はさらに追い詰められ、持てる者は富をさらに増やし、格差はより明確になったのでは」ということでした。

このパンデミックは私たちにとって何だったのか、私たちはその状況下で何を考え、どのような変化を見たのか、今は書かないけれど、時が経ち、俯瞰できるようになったとき、それを探るものとして小説が書かれるのだろうと予感させる鼎談でした。

ところで先日、映画評に惹かれてイタリア映画「丘の上の本屋さん」を観ました。

イタリアの美しい村、石畳の続く丘の上の古書店が舞台。店主の老人は自由の意味を持つ名前のリベロ。いつも同じ時間に来て店を開け、時間が来ると鍵をかけて帰ります。ある日、一人の褐色の肌の少年が店先のワゴンに置かれたコミックを眺めているので声をかけると、ブルキナファソからの移民でイタリアに来て六年になると言います。本を買うお金はないと立ち去ろうとする少年エシエンに、読み終わったら返しに来ればいいからと促すと、「ミッキーマウス」を選び、嬉しそうに立ち去ります。それからリベロとエシエンの本を通しての交流がはじまります。コミックは卒業と、次に渡した本は「ピノッキオの冒険」、次は「イソップ寓話集」、それから「星の王子さま」、「白鯨」と続きますが、リベロが薦める本が、日本人の私たちが名作として読んできた本と何ら変わらないことに驚かせられます。返しに来る度に目を輝かせて感想を述べる少年に、リベロは、「本は二度味わうんだよ。最初は理解するため。二度目は考えるため」、「物語というのはとても奥が深い。最初に感じたことがすべてじゃないんだ。読むことでじっくり考える時間ができる」と、本の読み方や様々な叡智を慈しみながら授けるのです。少年の表情が次第に知的で豊かで柔らかに変化していきます。そして、これは貸すのではなく贈り物だと手渡すリベロからの最後の本。

読書の素晴らしさと人間の尊厳を示唆してくれる映画です。機会がありましたら是非どうぞ。

目　次

- 巻頭コラム「本は二度味わうんだよ。」……1
- 森鷗外生誕160年・没後100年・離倉120年記念事業……2
  企画展「鷗外の小倉時代」
- 北九州森鷗外記念会との連携事業「森鷗外と小倉」講演会
- 山崎一穎先生　特別講演会……3
  「鷗外史伝のおもしろさ――『伊澤蘭軒』を中心に――」
- 第9回林芙美子文学賞　表彰式・記念トーク……4
- 第14回　子どもノンフィクション文学賞……5
- 第13回「あなたにあいたくて生まれてきた詩」コンクール
- 〈共催〉北九州、文化運動の軌跡……6
- 北九州詩人会議2022　詩と遠方―隔たりを巡る詩の旅路―
- 『リリー・フランキー　こども文庫』設置
- 〈共催〉森鷗外を書く……7
  ―第17回北九州市書道連盟代表作家展―
- 「櫓山荘子ども俳句大会」
- 〈共催〉第2回 日本現代川柳作家展
- 文学館文庫⑱　宗左近『長篇詩 炎える母』
- 「北九州市立文学館紀要」第5号刊行
- 「文学館友の会」新規会員を募集
- 展覧会予告……8
  〔第32回特別企画展〕「長野ヒデ子の絵本と紙芝居」
  〔企画展〕生誕120年記念
  「拝啓 林芙美子様　―芙美子への手紙―」
  〔第33回特別企画展〕
  「日本の世界文化遺産～写真が語る日本の歴史～」
- お祝い、お悔やみ／寄贈者・提供者、提供雑誌

森鷗外生誕一六〇年・没後一〇〇年・離倉一二〇年記念事業
企画展「鷗外の小倉時代」

二〇二二年は森鷗外（一八六二―一九二二）の生誕一六〇年・没後一〇〇年の節目の年でした。また、陸軍第十二師団軍医部長として滞在していた小倉を離れて一二〇年目でもありました。これを記念して文学館では「鷗外の小倉時代」展を開催しました。

鷗外は小倉滞在中、軍務の傍ら、新聞・雑誌への寄稿、講演、翻訳を行いました。また、公務で九州各地を訪れた際には、史跡や神社仏閣へも足を運びました。小倉での日々は、「小倉日記」と、帰京後発表した〈小倉三部作〉と称される小説「鶏」「独身」「二人の友」からも伺い知ることができます。

Ⅰ　原稿「和氣清麻呂と足立山と」「再び和氣ノ清麻呂と足立山との事に就きて」

原稿「和氣清麻呂と足立山と」は、一九〇二年一月一日の「門司新報」に掲載されました。和気清麻呂（七三三―七九九）と足立山（現・北九州市小倉北区）の伝承を調査・考察したもので、現在確認されている唯一の小倉時代に執筆した完全な原稿です。鷗外は帰京後も調査を重ね、翌一九〇三年一月「再び和氣ノ清麻呂と足立山との事に就きて」を発表します。

幾重にもなされた訂正の書き入れが、鷗外の深い思考を物語ります。両資料とも森鷗外記念館（津和野）の所蔵で、当館では初めての展示となりました。当該資料は冊子体に装幀されていますが、全ページをパネル化したもの、山崎一穎 森鷗外記念館館長による詳細な解読ともに展示しました。

Ⅱ　「小倉日記附録」紹介

「小倉日記附録」（文京区立森鷗外記念館所蔵）は、「小倉日記」本文と別に記録されました。「附録」は主に小倉滞在中に発表された論考が収められており、内容は「一、古文書及碑銘」「二、地方に関する小著」「三、倫理に関する小著」「四、文学美術に関する小著」「五、医学に関する小著」「六、軍事に関する小著」の六部にまとめられています。

このうち、「一、古文書及碑銘」には、小倉赴任中に閲覧した資料や史跡の碑文、図が収録されています。本展では、全集未収録の図版全二四点を、「小倉日記」の該当箇所と併せてパネルで紹介しました。

来場者の声（アンケート）

・直筆原稿には創作の苦悩の跡も見られて、鷗外さんの実相に出会えたような気がしました。
（70代・若松区）

・とても字がうまい人だったのですね。どんな筆で書いたのでしょう。
（40代・福岡市）

・自筆原稿は訂正時に紙を貼っている様子などもよく判りました。「小倉日記附録」は好奇心旺盛なところが垣間見えて面白かったです。
（50代・福岡市）

・小倉に赴任している間のことを詳しく知ることができてよかったです。
（30代・小倉北区）

北九州森鷗外記念会との連携事業
「森鷗外と小倉」講演会

北九州森鷗外記念会理事が講師を務める講演会が行われました。各回とも、聴衆は熱心に耳を傾けていました。

・一一月二六日（土）
演題　「森鷗外の『高瀬舟』――作品誕生の歴史背景を深める」
講師　寺岡賢治氏

・一二月四日（日）
演題　「森鷗外への回帰　中原綾子　戦後『スバル』」
講師　近藤晋平氏

・一二月一八日（日）
演題　「小倉時代の森鷗外」
講師　石井郁男氏

山崎一穎（かずひで）先生　特別講演会
「鷗外史伝のおもしろさ
――『伊澤蘭軒』を中心に――」

二〇二二年一二月一一日

企画展「鷗外の小倉時代」に関連して、山崎一穎先生（森鷗外記念館館長）による講演会が開催されました。抄録をご紹介します。

今日は森鷗外作品の中でも、研究者にも敬遠されがちな歴史小説の魅力を、みなさんと一緒に考えたいと思います。

明治天皇崩御と乃木希典夫妻の殉死を受けて、鷗外は「興津弥五右衛門の遺書」を書きます。ここから鷗外の歴史小説が始まったと言えます。それまでは自分の身辺や社会で起きた出来事を作品にしていて、格別に明確なテーマを持ってはいませんでした。

しかし乃木殉死以降ははっきりと「組織の中において『個』がどれだけ『個』として生きられるか」をテーマとして明確に打ち出しています。何の魂胆もなくただ明治天皇の恩義に感謝するという精神はどこから出てくるのかというのが最初の問いかけで、鷗外は過去の日本の武士のあり様から探ろうとします。

乃木殉死を受けて夏目漱石は「こころ」を書きます。「こころ」の〈先生〉は「明治の精神に殉死する」と言います。日本人の死に向かう至純な精神の源泉、ないしその精神のあり様を鷗外は過去の武士の世界から、漱石は現代人のエゴイズムをどう克服するかという未来へ向かって模索していきます。

鷗外は「阿部一族」で、切腹は無償ではなく、報恩と賠償が等価でやりとりされていることに気づきます。男たちは武士の義理に縛られ、やむなく切腹する場合もありました。

男性は個よりも組織を優先しています。鷗外が歴史小説で描く女性は封建時代でも生き生きとしています。「山椒大夫」の安寿も、「ぢいさんばあさん」のるんも自立的です。町娘では「最後の一句」のいちがいます。鷗外の歴史小説は女性の発見だと思います。

鷗外の歴史観の根底には司馬遷の「史記」があり、鷗外も〈本紀〉と〈列伝〉を縦軸と横軸に組み合わせ、時間と空間を自在に描く書き方をしています。

「渋江抽斎」にはじまる三大史伝「伊澤蘭軒」、「北條霞亭」もこの例に洩れません。抽斎や蘭軒は幕末の幕府の医官で漢籍の考証学者でもあった人たちです。しかし、子や孫の世代は明治維新の波を受け、才能があっても父たちのようには生きられなかった。抽斎没後、蘭軒没後――、こうした〈没後の発見〉は、鷗外の新しい伝記のスタイルです。鷗外は周囲の人々の歴史を掘り下げ、様々な転変を見事に浮き彫りにします。小さな物語同士がくっついて膨らみ、だんだん大きな大河ドラマを展開していくのです。

連載中、読者に情報提供を呼びかけたり、寄せられた情報をもとに誤りを訂正するということもしています。実は「伊澤蘭軒」連載中、中学生だった井伏鱒二は友人から聞いた誤った情報を変名で投書するのですが、この件も鷗外は作中で触れています。このように、語り手〈私〉は、時間と空間を実に自由に行き来します。こうした〈私〉の多義性も鷗外史伝の面白さのひとつです。

三大史伝にも、学問ができ、漢籍を自在に読みこなす教養を持ち、そして自立的に生きた女性たちが登場します。「渋江抽斎」の五百は、実は実際のエピソードを少し美化しているところもあります。逆に、「伊澤蘭軒」は小説的なことを削ぎ落としていますね。

「伊澤蘭軒」にこんな一節があります。「わたくしは所謂新しき女は明治大正に至って始て出でたのではなく、昔より有ったと謂（おも）う」。当時の平塚らいてうらの動きを横目で見ながら、ちょっとからかい気味な気もしますが（笑）、でも、認めて書いているのですね。

鷗外は二番目の奥さんに手を焼いていました。「わたしはあなたのところに来たのであって、お母さんの子になりに来たのではない」と言うような奥さんです。いまの大学生は「当たり前でしょう？」という反応ですが（笑）、当時はそうではなかった。ですが、鷗外は結局離婚しません。率直に物を言う女性を認めていたのでしょう。ドイツ時代、年上のピアノ教師の女性に誘われ音楽会や演説会などに足を運びますが、このとき目をひらかれたのではないでしょうか。

「伊澤蘭軒」は新聞連載中から新聞という公の場に、個人のつまらない伝記を延々と書いて常識がないと非難する投書が寄せられていました。これに対し鷗外は、自分の作品の「有用無用を論ずることを忌避する」としたうえで、非難する人は伝記に興味がないのではなく、歴史を見ることを厭うのだと分析します。古いものを排除し、新しさや合理性だけを追求する考え方に警鐘を鳴らし、「わたくしは学殖なきを憂ふる。常識なきを憂へない」と述べます。鷗外は合理的にまとまりを付けることや解釈を拒否し、時間と空間とに生動する歴史を捉えました。ここに私は面白さを感じます。

鷗外伝記の面白さは、追求する好奇心です。謎解きの面白さです。さあ、読みましょう！

第9回 林芙美子文学賞 表彰式・記念トーク

二〇二三年二月二五日

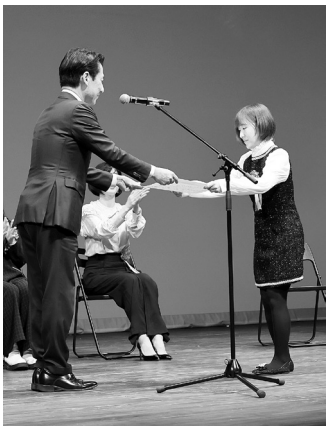
今回で九回目を迎えた林芙美子文学賞表の表彰式・記念トークを北九州芸術劇場中劇場にて開催しました。対面式での表彰式は四年ぶりの開催となりました。（参加者：二二二人）

●表彰式

全国から寄せられた四〇七編の応募作品の中から、神奈川県在住の屋敷葉（やしきよう）さんの「いっそ幻聴が聞けたら」が大賞に選ばれました。

表彰式には、最終選考委員の井上荒野さん、角田光代さん、川上未映子さん、武内和久市長などが出席されました。

屋敷さんには武内和久市長から、表彰状と盾、副賞（一〇〇万円）が授与されました。



武内市長から表彰を受ける屋敷さん

大賞受賞の屋敷さんは、「自分の作った主人公達にはいつも振り回され、小説の輪郭を掴むこともおぼつかない私に何ができるのだろうかと、より深く考えるようになった。壁にぶつかりながらも、主人公達が迎える物語の終末をみることは、言い知れぬ喜びを与えてもらえるものだと痛感する。この賞に恥じぬよう、これからも書く手を止めずに、一層小説と真摯に向き合っていきたい。」と語りました。

最終選考委員からは、「女性がどんどん働いて、自立していくという今の風潮とは逆の感じの情熱があり、登場人物も自覚していない素直さがあり、誰にも気づかれない切実さが全編を通してしっかり書かれている。」「この作品の良さは、主人公の女性の〈働きたくない、全部他人や世の中が悪い〉という迫力であり、よく頑張って怠惰さを書いたと思う。」「この作品はある種のピカレスクノベルだと思う。ここまでダメな人を最後まで書ききった勇気とその判断を評価した。」などの選評をいただきました。

また、今後の応募作品に望むこととして、「その人にしか書けないテーマで、どうしてそれを書きたいのかが伝わる作品を読みたい。」「たとえ一行でもいいので、私の知らないこと、読まなければ出会えなかったものがあると読んで良かったと思える。」「良いと思える作品の中には何か目指しているものがある。ポテンシャルとモチベーションの両方を感じさせてくれる作品に出合えるとうれしい。」とのコメントをいただきました。

●記念トーク

表彰式に続き、「この3年のあいだに考えたこと」をテーマに、コロナ禍での執筆状況や今後の取組などについて、最終選考委員の皆さんから話を伺いました。（聞き手：今川館長）

記念トーク（最終選考委員と今川館長）

【井上荒野さん】

コロナ禍でも、在宅で執筆活動を行っていたので、生活上はあまり変化はなかった。

コロナ禍に『生皮 あるセクシャルハラスメントの光景』（朝日新聞出版）や『僕の女を探しているんだ』（新潮社）を刊行し、『あちらにいる鬼』（朝日新聞出版）が映画化された。今後、戦争中を舞台にした作品が書けないかと思っている。

【角田光代さん】

六年かけて源氏物語の現代語訳にとりかかり、二〇二〇年に『源氏物語（上・中・下）』（河出書房新社）を刊行した。執筆中は、小説の書き方が分からなくなるくらい源氏物語の世界に入り込んだ。コロナ禍に『ゆうべの食卓』（オレンジページ）や新聞に連載していた小説『タラント』（中央公論新社）を刊行した。現在の週刊誌での連載が終ってから、次の仕事を考えたい。

【川上未映子さん】

著書『ヘヴン』の英訳版が「ブッカー国際賞」の最終候補作品に選出されるなど、コロナ禍でも海外の仕事も多かったので、コロナとの両立は大変だった。新聞に連載していた小説『黄色い家』（中央公論新社）が刊行され、『すべて真夜中の恋人たち』の英訳版が「全米批評家協会賞 小説部門」の最終候補作品に選ばれた。現在は、絵本のピーター・ラビットの翻訳を進めている。

来場者の声（アンケート）

・小説家の皆さんの物事の捉え方が豊かで、感動させられる話がたくさんありました。（20代・八幡西区）

・本を読まなくなっていましたが、話を聞いて、また読書を再開しようと思いました。（50代・小倉南区）

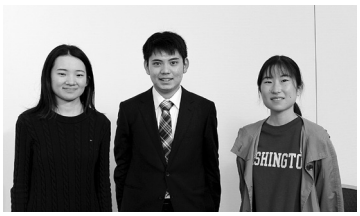
・受賞された方の今後が楽しみです。（40代・八幡東区）

第14回　子どもノンフィクション文学賞

二〇二三年三月一八日

この文学賞は、子どもたちが体験した出来事や取材したことを「ノンフィクション」に書くことで、人々や社会への関心を持つきっかけとなること、そして北九州ゆかりの文学者たちが築いてきた豊かな文芸の土壌を継承していくことを願って開催されています。今年度は、小学生の部は２５３作品、中学生の部は２０７作品、計４６０作品の応募がありました。表彰式は文学館交流ひろばで行われ、武内和久市長や最終選考委員のあさのあつこさん、最相葉月さん、リリー・フランキーさん等から受賞者の皆さんへ盾と副賞が贈られました。

「受賞者のことば」では、緊張していましたが、しっかりと気持ちを伝えることができました。表彰式には過去の大賞受賞者である梅田明日佳さん、座間耀永さん、新池谷悠さんがお祝いにかけつけてくれました。先輩たちの温かいエールに、受賞者の皆さんも目を輝かせていました。


座間さん　梅田さん　新池谷さん

受賞者　小学校の部（敬称略）

大賞＝藤本千尋（名古屋市立八事東小学校）佳作＝久保咲楽（帯広サドベリーの風・帯広市立大正小学校）志賀優龍（豊橋市立福岡小学校）選考委員特別賞＝川名蒔子（さいたま市立尾間木小学校）中村心美（墨田区立第四吾嬬小学校）柚野薫三郎（大分市立滝尾小学校）、学校賞＝北九州市立小石小学校、智辯学園和歌山小学校、横浜市立茅ヶ崎台小学校

受賞者　中学校の部（敬称略）

大賞＝田村萌梨（鳥取大学附属中学校）佳作＝萩原虎徹（柏原市立玉手中学校）島崎結衣（甲府市立北東中学校）選考委員特別賞＝内田博仁（神奈川県立あおば支援学校中等部）佐伯皆人（盈進中学校）チャンコクアン（柏原市立玉手中学校）学校賞＝柏原市立玉手中学校、熊本大学教育学部附属中学校、筑波大学附属中学校

第13回「あなたにあいたくて生まれてきた詩」コンクール

二〇二二年一二月一〇日

北九州市立文学館では、北九州市出身の詩人　宗左近、みずかみかずよを顕彰するとともに、子どもたちの豊かな想像力と表現力を伸ばすことを目的に、「あなたにあいたくて生まれてきた詩」コンクールを、実施しています。

第13回目を迎える今年度は、北九州市内外から小学生の部に97作品、中学生の部には１９６０作品の応募がありました。表彰式は文学館交流ひろばで行われ、最終選考員の平出隆先生の講評や最優秀賞受賞者による詩の朗読がありました。

受賞者　小学校の部（敬称略）

宗左近賞＝田中みさき（鹿児島市立原良小学校）みずかみかずよ賞＝金子愛奈（福岡教育大学附属小倉小学校）北九州市長賞＝井川月椛（粕屋市立仲原小学校）北九州市教育長賞＝日川紗那（大阪市立晴明丘南小学校）北九州市立文学館長賞＝藤本千尋（名古屋市立八事東小学校）佳作＝10名

学校賞＝北九州市立井堀小学校

受賞者　中学校の部（敬称略）

宗左近賞＝平木みさき（福岡県立輝翔館中等教育学校）みずかみかずよ賞＝水谷友理子（フェリス女学院中学校）北九州市長賞＝鈴木悠大（大阪教育大学附属池田中学校）北九州市教育長賞＝世利佳那美（九州国際大学付属中学校）北九州市立文学館長賞＝近藤聖真（北九州市立東郷中学校）佳作＝10名

学校賞＝飯塚市立飯塚鎮西中学校、北九州市立永犬丸中学校

このコンクールは次回も開催予定ですので、小中学生のみなさんのご応募を心よりお待ちしています。

〈小学生の部〉

〈中学生の部〉

〈共催〉北九州、文化運動の軌跡

二〇二三年三月一日～三一日

北九州文化運動研究会（代表・西田心平）主催で、八幡製鉄所を中心とした北九州の戦後の文化運動を紹介する展覧会が開催されました。

北九州では戦後から一九六〇年代にかけて文化運動が盛んでした。その中心を担ったのは、八幡製鉄をはじめとする企業で働く労働者たちでした。彼らは職場雑誌、サークル誌、同人誌に小説や詩、短歌や俳句などを発表しました。文芸、芸術を生み出すことで労働者たちの意識の連帯を目指しました。

展覧会は四部構成で、第一部では前史として、八幡製鉄の操業開始から一九四五年の敗戦までを紹介。所内報「くろがね」や、日鉄詩人会の報告書などを展示しました。

第二部では戦後、労働者と会社との関係の変化のなかでの文化運動を追い、製鉄に勤めた岩下俊作らの創作研究会の活動を紹介。このころの労使協調のなかで生まれた職場雑誌「製鉄文化」などを展示。第三部では五〇年代の本格的な戦後復興と、それが孕んだ矛盾の中での表現活動を追いました。八幡製鐵では、文化サークル協議会や労働組合が母体となった雑誌の発行が活発になり、一方で佐木隆三らの「日曜作家」、詩誌「鉄と花」のような職場を越えた雑誌も多く刊行されました。

第四部では五〇年代に萌芽を見せた労働者の表現活動が文化運動へと接続されてゆく様子を追いました。佐木隆三らは「日曜作家」以降、次々に雑誌を刊行し、「文学運動」を展開。働くことと表現との結びつきを突き詰め、問うていきました。

北九州で展開された文化運動が、今日の北九州の文化の一つの礎であることを感じていただける展覧会となりました。

北九州詩人会議二〇二二 詩と遠方 ―隔たりを巡る詩の旅路―

二〇二二年一二月一六日～一八日

北九州にゆかりのある詩人を中心に、中国の詩人を加えたメンバーで時間を共有し、対話と詩作のプログラム「北九州詩人会議二〇二二　詩と遠方―隔たりを巡る詩の旅路」が北九州市主催で行われました。参加した詩人は日本から、高橋睦郎さん、竹内新さん、平田俊子さん、渡辺玄英さん、石松佳さん。中国からは北島さん、于堅さん、西川さん、田原さん、閻志さん、路也さんが参加しました。（中国からは、田原さん以外はオンラインでの参加）

公開プログラムとして、16日に北九州芸術劇場・小劇場（小倉北区）で朗読会とトークがあり、翌17日は旧大連航路上屋・ホール（門司区）でシンポジウム「日中詩人会議」が行われました。シンポジウムでは、「遠方」に対して「付近」という概念が提示されるなど、詩における「距離」などについてのお話がありました。

なお本プログラムのシンポジウムの内容および詩作は「現代詩手帖」二〇二三年二月号に掲載されました。

リリーさんからの贈り物 『リリー・フランキー こども文庫』設置

二〇二三年三月一八日

第14回子どもノンフィクション文学賞表彰式において、最終選考委員であるリリー・フランキーさんから、子ども向けの本のプレゼントがあり、『リリー・フランキー　こども文庫』として、コーナーのお披露目がありました。

これは、リリーさんが二〇二二年三月十九日に第54回北九州市民文化賞を受賞された際に、スピーチの中で「副賞の賞金は子どもたちへの本の購入に充て文学館に寄贈したい」と言われたことから実現したものです。

テレビアニメにもなったリリーさんの『おでんくん（小学館）』をはじめ、子ども向けの絵本や小説など、169冊を寄贈いただきました。

文学館としても、一人でも多くの子どもたちに文学館に足を運んでもらい、この文庫でいろいろな本に出合い、子どもたちの笑顔がはじけるコーナーにしたいと考えています。

【こども文庫のいろいろ】

リリー・フランキーさん
『おでんくん』（小学館）、『おでんくん2』（小学館）、『東京タワー　オカンとボクと、時々、オトン』（新潮社）

那須正幹さん
『那須正幹童話集（全5巻）』（ポプラ社）、『秘密基地のつくり方教えます』（ポプラ社）、『ぼくらの地図旅行』（福音館書店）

最相葉月さん
『絶対音感』（新潮社）、『星新一　一〇〇一話を作った人（上・下）』（新潮社）

あさのあつこさん
『バッテリー（全6巻）』（教育画劇）、『THE MANZAI（上中下巻）』（ポプラ社）

〈共催〉森鷗外を書く
―第17回北九州市書道連盟 代表作家展―

二〇二三年一一月一五日～二〇日

森鷗外の生誕一六〇年、没後一〇〇年と小倉を離れて一二〇年を記念し、北九州書道連盟主催で、書道展「森鷗外を書く」が開催されました。

六〇名の作家による、鷗外の作品に題材を採って揮毫された六〇作品が展示されました。

力作ぞろいの「櫓山荘子ども俳句大会」

櫓山荘子ども俳句大会実行委員会（北九州俳句協会、北九州市立文学館、北九州市教育委員会、北小倉自治連合会、久女・多佳子の会、小倉北区役所総務企画課）主催で二〇〇五年から毎年開催されているこの俳句大会は、今年度で18回目を迎えました。

今回も、北九州市を中心に、小学校23校、中学校31校、特別支援学校1校の計55校から、4529人の児童生徒のみなさんから作品が届きました。

多数の応募作品の中から、特別賞10作品、秀作36作品、佳作77作品が選ばれました。

文学館では、一一月四日～一二月二八日の間、本俳句大会の特別賞・秀作に選ばれた作品の展示を行いました。子どもたちの力作にうなずきながら感心されているご様子の方や、児童生徒の保護者の方なのか、嬉しそうにカメラを向ける様子も見られました。

〈共催〉第二回 日本現代川柳作家展

二〇二三年三月一日～三一日

川柳くろがね吟社（主宰・古谷龍太郎）主催で、全国の現代川柳作家の作品を紹介する展覧会が行われました。現代日本を代表する川柳作家四〇名が揮毫した色紙八〇点が展示されました。

世相や人情、風俗を詠んだ作品を楽しく鑑賞できる場となりました。

文学館文庫⑱ 宗左近『長篇詩 炎える母』

戸畑生まれの詩人・宗左近の代表詩集を、全篇完全収録で刊行しました。

一九六七年刊行の『炎える母』は、宗の三冊目の詩集で、翌年、第六回藤村記念歴程賞を受賞しました。宗の詩人としての評価を固めた詩集といえます。空襲の炎で母を目の前で喪った実体験から二〇年余りの時を経て生み出された詩です。ぜひお手に取ってお読みいただければと思います。

販売価格は一〇〇〇円、文学館インフォメーションの他、ブックセンタークエスト小倉本店でも販売しています。

「北九州市立文学館紀要」第5号刊行

二〇二三年三月三一日

《目次》

・【資料紹介】宗左近〈縄文〉ノート
解題・翻刻（稲田大貴・小野芳美）
・主な寄贈資料　二〇二一（令和三）年度

文学館及び全国の主要図書館などで閲覧していただけるほか、当館ホームページでも公開しています。

「文学館友の会」新規会員を募集

友の会活動は、文学や文学館に関心がある人々が集まり、文学・文芸に関する知識教養、理解を深めるとともに、文学館の活動を支援することを目的とし、どなたでも入会できます。

ただいま、新規会員を募集中です。会員期間は二〇二三年四月一日から二〇二四年三月までの一年間で、会費は二〇〇〇円です（その後、一年ごとの更新となります）。

【会員の特典】

○常設展がいつでも見られる「年間定期券」
○「特別企画展ご招待券」を一枚
○特別企画展の「図録（文学館製作分）」を一冊
○文学館が実施する文学賞の「作品集」を一冊
○イベント、講演会等への優先参加
○館報、友の会会報を郵送　など

入会方法は、①文学館の窓口で直接、会費をお支払いいただく方法と、②専用の郵便局の振込用紙でのお振込の二つがあります。振込用紙をご希望の方は、お送りしますので文学館までお知らせください。

問い合わせは、北九州市立文学館友の会事務局（文学館事務局内）☎093―571―1505へ。

予告
〈共催〉アメリカ文学
その広大さと多様さ
第45回光草書道展
会期：2023年4月29日(金・祝)～5月7日(日)
会場：北九州市立文学館 企画展示室

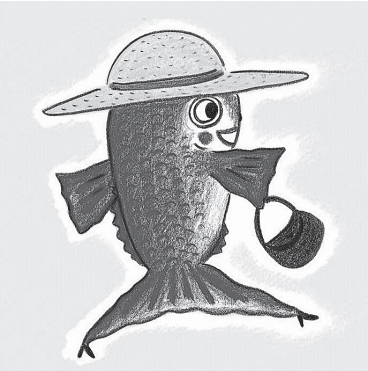
関連イベント
特別講話
「アメリカ文学における覚醒の衝動」
講師：江頭理江氏（福岡教育大学教授）
日時：2023年4月30日(日) 13時～14時30分
※4月18日(火)から電話(093-571-1505)で受付開始

展覧会開催予告

第32回特別企画展

長野ヒデ子の絵本と紙芝居

7月22日(土)▼9月18日(月・祝)



『せとうちたいこさん　デパートいきタイ』
童心社・刊　(c) Hideko Nagano, 1995

絵本作家の長野ヒデ子さんの展覧会を開催します。
長野さんは子ども文庫活動から創作活動を開始し、絵本、紙芝居、イラストレーションなどで活躍する一方で、エッセイや翻訳も発表しています。展覧会では、「せとうちたいこさんシリーズ」を始めとする長野さんの代表的な絵本と紙芝居の魅力を原画などを通して紹介します。

企画協力：メディアリンクス・ジャパン

第33回特別企画展

日本の世界文化遺産
～写真が語る日本の歴史～

9月30日(土)～12月3日(日)(予定)

企画協力：クレヴィス

企画展　生誕120年記念

拝啓 林芙美子様
―芙美子への手紙―

5月20日(土)～6月30日(金)

門司生まれの作家・林芙美子の生誕120年の記念年にあわせ開催します。展示では主に、所蔵している芙美子宛書簡(1929年～1951年)を時代に沿って紹介します。

お祝い

・高橋睦郎さん(詩人)が、第81回西日本文化賞、および第1回日本シェイマス・ヒーニー賞を受賞されました。
心からお祝い申し上げます。

お悔やみ

・磯崎新さん(建築家)享年91
二〇二二年一二月二八日にご逝去。
・西村勇晴さん(前北九州市立美術館館長)享年74
二〇二三年一月五日にご逝去。
心よりお悔やみを申し上げます。

■寄贈者・提供者

東泰、有馬記念館保存会、有森信二、粟谷さやか、安徳由美子、石松佳、市川市文学ミュージアム、井手久美子、井上靖記念文化財団『伝書鳩』編集室、岩下祥子、植村隆雄、大貝晃章、大土由美、大渕基樹、岡田功、かごしま近代文学館・メルヘン館、神奈川近代文学館、鎌倉文学館、神沢利子、北九州文化連盟、紀伊國屋書店出版部、九州大学日本語文学会、近代作家旧蔵書研究会、黒木なみ江、こおりやま文学の森資料館、古賀博文、小正路淑泰、坂口博、朔太郎大全実行委員会事務局、山頭火ふるさと館、鹿田欣子、柴田康弘、司馬遼太郎記念館、新宿区立漱石山房記念館、新宿歴史博物館、杉山満丸、ソコロワ山下聖美、鷹取美保子、竹之内靖方、多田康廣、谷さやん、中央公論新社文芸編集部、鳥影社、調布市武者小路実篤記念館、鎮守恵子、坪内稔典、鶴岡市立藤沢周平記念館、田原、徳島県立文学書道館、永田喜久男、中原中也記念館、中邨政也、夏野雨、日本現代詩歌文学館、沼津市芹沢光治良記念館、野田宇太郎文学資料館、萩原朔太郎研究会、波佐間義之、姫路文学館、姫路文学館、福岡県労働組合総連合、福岡市文学館、ふくやま文学館、藤本啓司、文学の森、文京区立森鷗外記念館、毎日新聞出版、村田喜代子、森鷗外記念会、森鷗外記念館(津和野町)、柳生じゅん子、山崎一穎、山口公和、吉村昭記念文学館、リリー・フランキー

■提供雑誌

青嶺、馬醉木、阿蘇、花鶏、あん、いのちの籠、海、絵合せ、沖、GAGA、海峡派、回游、北九州文化、九大日文、鯨々、月刊川柳マガジン、玄海、自鳴鐘、書馨、scripta、青穂、鄰、船団、川柳くろがね、蘇峰、空、第三次ERA、第八期九州文學、卓上作法、タルタ、鬣、小さい旗、天籟通信、とびうお、新墾、虹野、ひびき、浜木綿、ふだんぎ、ふよう、ぽち袋、八雁、遼、りんどう

2023年3月31日 発行

北九州市立文学館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内4-1
TEL 093-571-1505
https://www.kitakyushucity-bungakukan.jp/

■ 開館時間
9:30～18:00(入館は17:30まで)

■ 休館日
毎週月曜日(月曜日が休日の場合は翌日)
年末年始

北九州市印刷物登録番号 2210140C